キズナエピソード

丘田マリアンヌ　1話

//ヴィジュアルノベル形式開始

悪魔どもとの激しい戦いに勝利した俺たち。

そんな時、俺はマリアンヌに話しかけられた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［マリアンヌ］

「オムニスたん、大丈夫だった……？

ごめんっス、僕がもう少し強ければ

もっと危なげなく勝ってたんスけど……」

［黒猫］

「いや、謙遜することない。

マリアンヌはすごく頑張ってると思うぞ」

［マリアンヌ］

「そ、そうっスか？

か、顔から火が出そうなくらい、恐縮っス……」

［黒猫］

「……！」

［マリアンヌ］

「……オムニスたん？　ど、どうかしたんスか？」

［黒猫］

「……いや、なんでもない。

そろそろ、ここから離れようか」

//ADV形式終了

//暗転

//場面転換：白い部屋

//ヴィジュアルノベル形式開始

白い部屋に戻って来た俺は、感慨深くため息を吐いた。

「顔から火が出そうなくらい、恐縮っス」

この言葉に強い既視感を覚える。

まるで学生時代の青春の匂いが思い起こされるような、

そんな感覚……。

そんな時――

//ページ切り替え

突如として、俺は耐えがたい睡魔に襲われる。

視界がぼんやりとしたモヤに包まれる中で、

俺は知りもしない記憶を垣間見た。

それは、とある休日……。

その時の俺は、友だちに誘われて他校の学園祭を見に来ていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//聖チャールズ学院・廊下（学園祭）

［とびお］

「……迷子になってしまった」

［とびお］

他校の文化祭なんて初めてなものだから、浮かれすぎた。

あと、人が多すぎる。

一緒に来た友達とは、早々にはぐれてしまった。

［とびお］

俺は友達を見つけるため、

周囲に気を配りながら、

もう一度学内を回っていくことにした。

［とびお］

すると、廊下の奥の見つけづらい場所に、

漫研のブースがひっそりとあることに気がついた。

一度来たときは見逃していたらしい。

［とびお］

もしかしたら、友達はそこにいるかもしれない。

俺は、漫研のブースへと足を踏み入れることにした。

//漫研のブース

［とびお］

……が、友達はいなかった。

と言うか、受付の女生徒とお客1人だけしかいなかった。

［とびお］

まぁ、せっかくなので見ていくことにしよう。

俺はこれでも、漫画は大好きだしな。

［とびお］

ブースにはオリジナルの漫画がいくつか並んでいた。

俺はその中から、自然と一つの冊子に手を伸ばす。

［とびお］

漫画のような絵本のような、不思議な冊子だった。

気づけば俺は、その冊子を読み耽っていた。

［りり］

「ねーねー。その本、どうだった？」

［とびお］

読み終わったところで、女生徒が話しかけてきた。

客だと思っていたが、どうやら関係者らしい。

［りり］

「あ、急にゴメンね。

アタシ、りりってんだ。よろー。

……で、どうだった？」

［とびお］

この子がこの冊子の作者なのだろうか？

人は見かけによらないな、と思いつつ、

素直に感想を述べることにする。

［とびお］

「なんて言ったらいいかわかんないけど……。

なんだか優しくて暖かい感じがして、好きだな」

［りり］

「ひょー！　嬉しいこと言ってくれんじゃん！

だってさ、マリ夫！」

［とびお］

彼女は嬉しそうに、受付をしていた女生徒に呼びかけた。

［とびお］

「マリ夫……？」

［りり］

「あー。マリ夫ってのはあだ名。

本名は丘田マリアンヌちゃん！

その本、あの子が書いたんだよー」

［とびお］

紹介された女生徒は、顔を合わせるのが苦手なのか、

その場から動かずに俯いていた。

しかし、りりに手を引かれて、俺の前までやってくる。

［りり］

「マリ夫、良かったね、めっちゃ褒められたじゃん！」

［マリアンヌ］

「ちょっと、りりちゃん……！」

［マリアンヌ］

「あの、ささ、さっきのほ、本当っスか……？」

［マリアンヌ］

「か、顔から火が出そうなくらい、恐縮っス……」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

そこで初めて、俺はマリアンヌと向かい合った。

火が着いたかのように、真っ赤になって照れる彼女。

その照れ顔を隠すようにうつむきながらも、

上目遣いで俺の顔を覗き込んでいる。

その姿に、俺の心の奥は大きく強く高鳴ったのだった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//1話END